

「2017 ぎふ平和のつどい」の開催に当たって

実行委員長 安藤征治



「平和とは---?」「平和な社会を築くために、私に出来ることは---?」と、時に自分に問いかけてみたいと思います。そして、今がその時ではないかと思うのです。

平和を考える市民集会、「ぎふ平和のつどい」の開催も9回目を迎えます。

これからの社会のあり様を考えた時、キー・ワードは「多様性」と「共生」であると思います。生きものが生存し続けるためには、この2つが必要条件です。互いに違いを認め、共に生き合うことの出来る社会こそが、正常な社会であると思います。「あらしのよるに」出会ったオオカミとヤギ、この二者の生き様に学びながら、平和について多くの皆さんと共に考えてみたいと思います。

「あらしのよるに」夢はふくらむ

子どもにも大人にも愛され、ロングセラーを続けている『あらしのよるに』。作者のきむらさんのお話が聴きたい、作品を群読したいと言い出した願いが実現することになった。なんという幸せ。この物語には和楽器の音色が似合うと思う。和太鼓と篠笛の演奏家のお二人に加わっていただくこともトントン拍子で決まった。さあ、あとはどのような群読にするのかが大きな課題。ただいま、構成のイメージをふくらませ、知恵をしぼっている最中である。

あらしのよるに出会ったオオカミとヤギは、互いの姿が見えないまま(それぞれが味方だと思い込んで)語り合い、心をかよいあわせる。晴れた翌日、二匹は待ち合わせて思い違いに気づく。しかし、二匹は、食うか食われるかの立場を越えての友だちづきあいを始める。やがて仲間たちの知るところとなり、第七話の完結までダイナミックなストーリーが展開される。

その一連の物語の第一話、あらしのよるのできごとを今年の市民ステージで演じる。人間だって、平和を求める気持ちを持ち続けたら、姿も主義主張も違う相手ともきっと仲良くなれるはず。そんなことをオオカミとヤギから教えてもらいながら。
(浅井彰子 「群読」構成・演出 担当)

きむらゆういちさんのお話を聞くのが楽しみです

薬局の待合室でふとテレビをみたら、中村獅童さんが「あらしのよるに」を歌舞伎で演じた思いを語っていました。(→写真参照) きむらゆういちさんの思いを自分なりに受け止め、相手を思う気持ちがあれば、争いも起きない平和な世界になるとの思いで演じてみえました。わかりやすい歌舞伎で、是非みたいと思いました。

そしてこの秋に、絵本作家のきむらゆういちさんのお話が聞けるので、とても楽しみにになりました。
(井平美恵子 「岐阜・九条の会」)



敵対する者同士が心を通わせる世界・「あらしのよるに」を読んで

この世には天敵というものがある。山羊にとってのオオカミ。これは本能的なものである。人間世界では民族、宗教など文明文化の対立から生まれた憎悪が似たものとしてある。人間の世界の敵対する者同士が心を通わせる。これを動物の世界に仮託して描いたのが「あらしのよるに」であろう。

二匹はお互いの正体を知らず心を通わせる。そこには自然の猛威の前ではただ、互いに温め合う命だけがある。このようなことは人間の世界では時としてありうることだろう。敵対する民族間で敵同士であっても、個人として同じ状況に置かれたら、あっても不思議ではないと思う。このような設定は小説、映画のテーマとしてよく語られる。

心と心の結びつきだけが支配する理想の世界、いってみれば、極楽浄土の世界といえようか。ガブとメイはそんな世界に入り込んだ。いわば無知なるがゆえの浄土世界である。二匹はこの「友情」を最高の価値とする。この物語はこれで完結しているともいえる。

(牧野光陽 「さぎ山、ときわ九条の会」)

*絵本『あらしのよるに』は、単行本(第1巻)と、その後刊行された7巻までを収めた『完全版 あらしのよるに』があります。オススメは後者です。全体の流れがわかりますし、お値打ちですから。